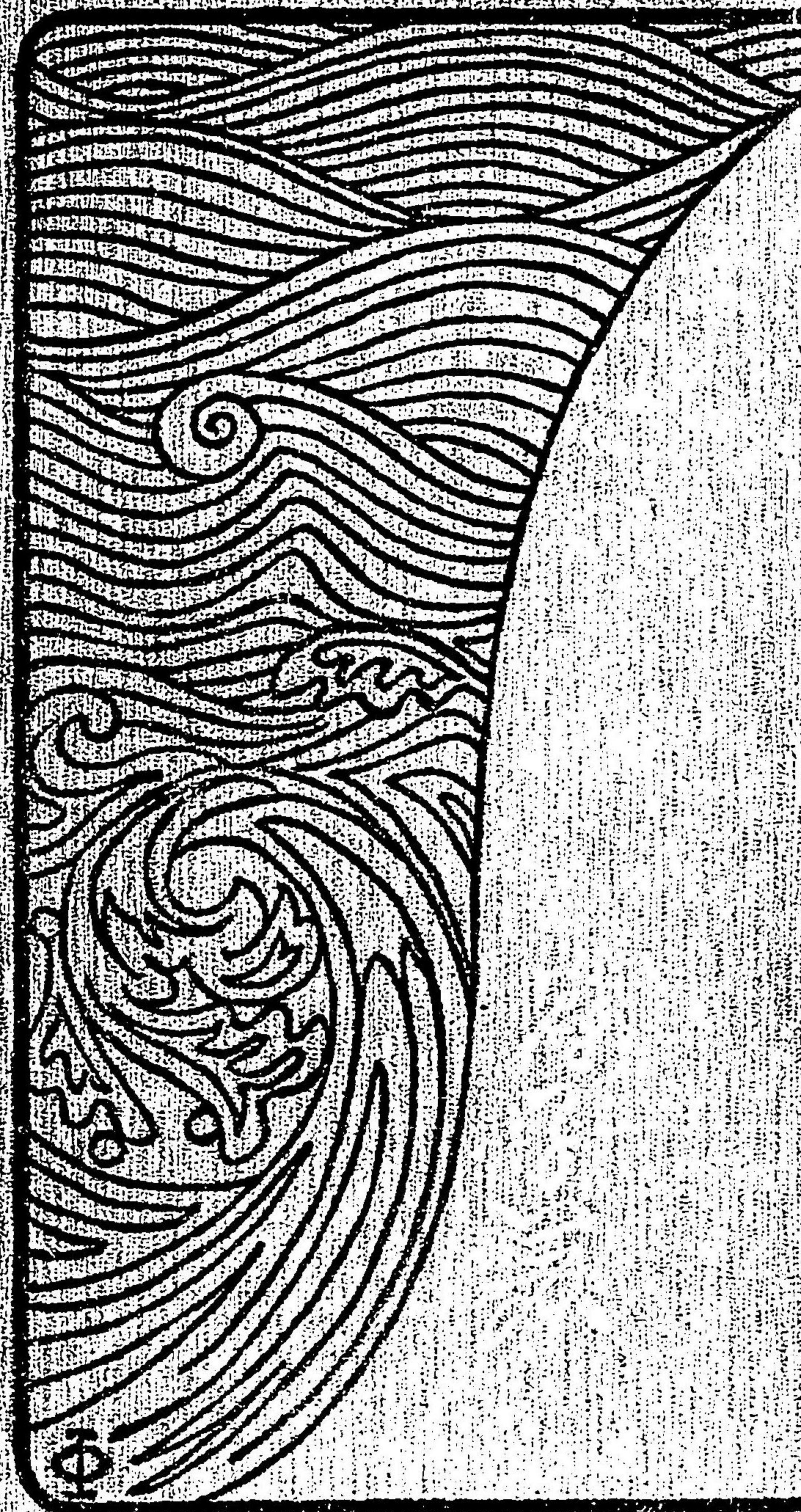
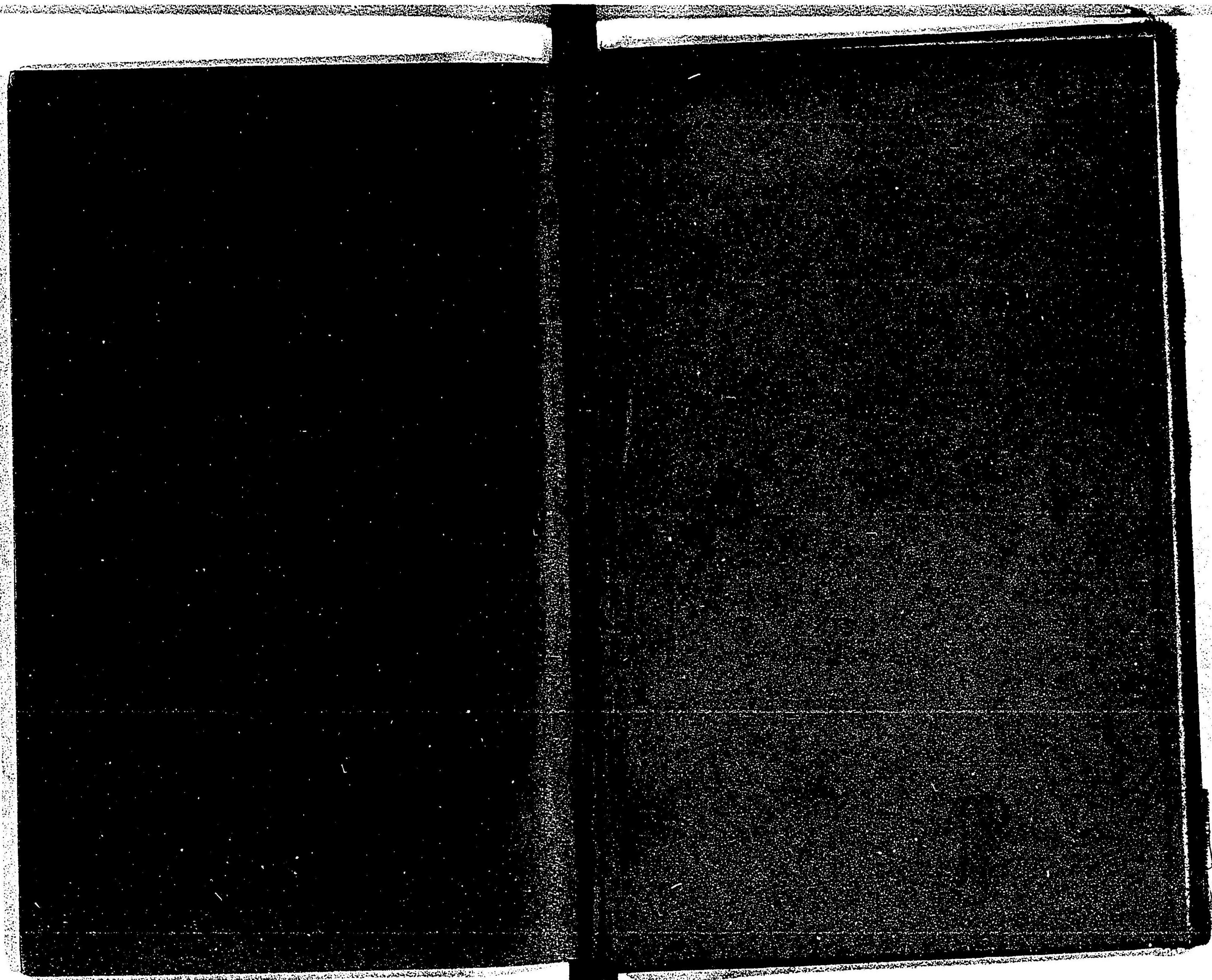


339

33

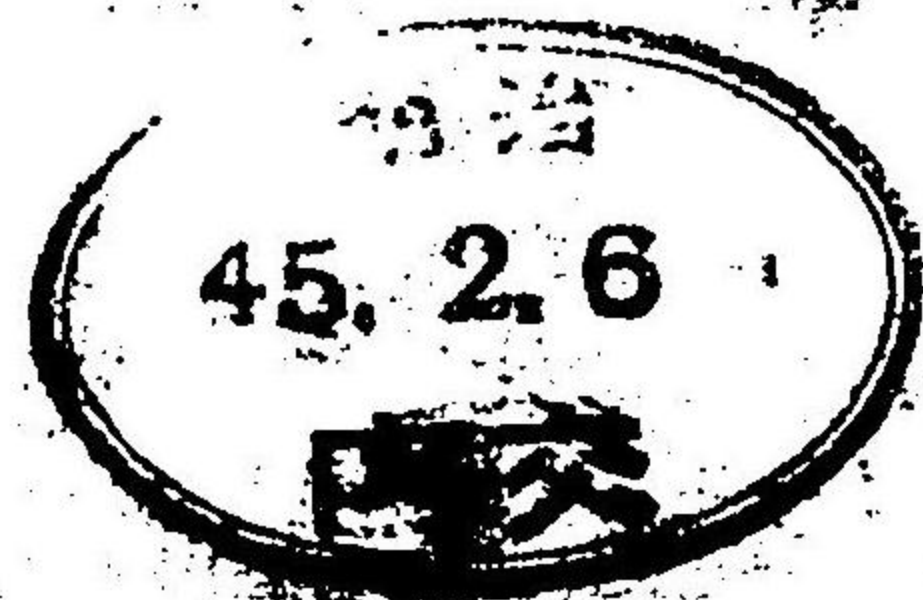
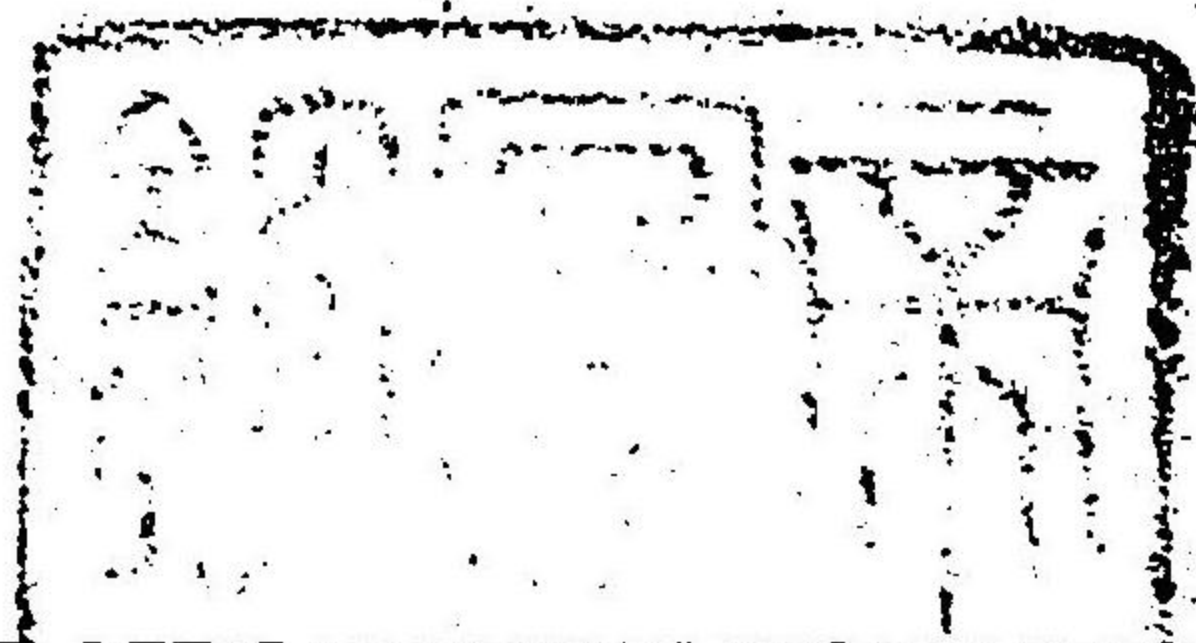




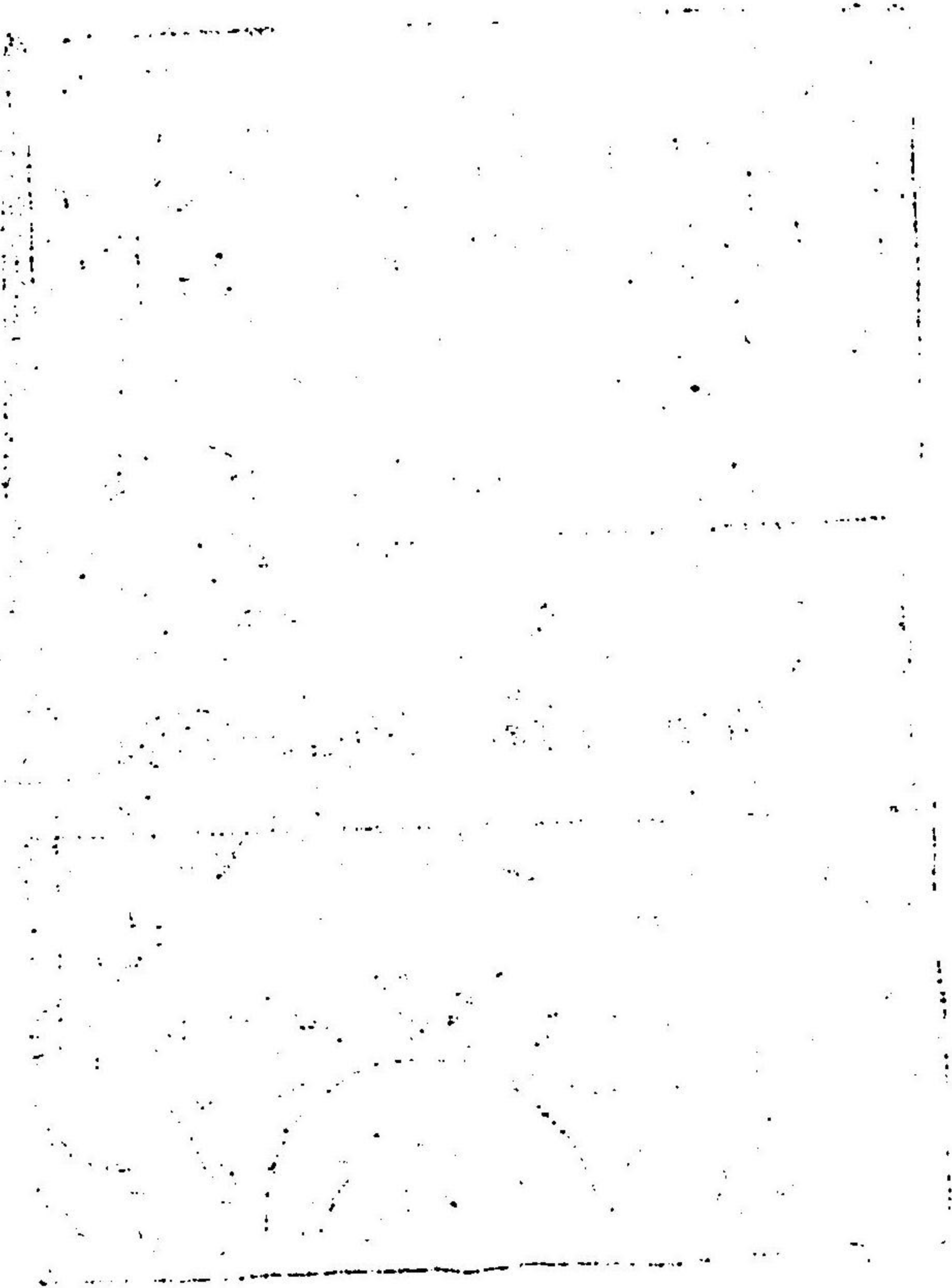
339

33

339-22



A  
Mon Mari Bien-aimé





波

與謝野晶子

美しく黄金を塗れる塔に居て十とせさめさ  
る夢の人われ

紅き絹二つに切りて分つとき戀のやうにもも  
の悲しき

山の鳥掛巢が啼けば天竺の破羅門の顔おもほ  
ゆるかな

よしあしは後の岸の人にとへわれは颯風にの  
りて遊べり

ひたひたと身を投げかけて思ふらく蛇の心の  
われにあらはる

六枚の障子の破目あちこちに人の覗ける山  
くら花

黄なる蝶我をめぐりてつと去りぬものゝみ書  
くをうしと見にけん

四

菊の助さくの模様のふり袖の肩脱がぬまに暮  
となれかし

あさまじき素肌の少女見るとき貝のからか  
なましろけれども

うとましや紛るることの日に多く戀も妬みも  
姿さまざま

この年の春より夏へかはる時病ののちのおち  
髪ぞする

わり竹に紅紙はれる舞あふぎ猿の振る日も涙こぼれぬ

五

水無月の青き空よりこぼれたる日の種に咲く  
日まはりの花

六

わが逢はむ男の数を語れよとたはぶれつれば  
相人は逃ぐ

またよそに目うつるまじとたのみしも神代の  
こととなりけるかな

にははしさおよそ少女の心ほどみたせる璃瑠  
の花瓶もて來

梢より音して落つる朴の花白く夜明くるこゝ  
ちこそすれ

二十をば七八つこせし放埒の弟が穿くひだな  
袴

七



八  
過去未來云ひもて行けば虚無ながら念をし掛  
くれこの君のため

君が門まへになしたる青き道わが歩むとき秋  
の風吹く

十年前まだすなはなる風俗のわが里に來し親  
子の息子よ

くれなるの海髪の房するすと指をすべりぬ  
春の夜の月

初夏の楓の枝に藤ちれば花笠に似てなまめか  
しけれ

水いろの麻のしとねにあけがたのいたづら臥  
の手も指も冷ゆ

かたはらへやはらかに倚りもの思ふこのおも  
むきの中に死ぬべき

わが宿世浮木に身をばくくられて捨てられに  
けん流れ來にけん

秋の朝黍の木などの白き根を出すここに寒  
き瓜先

兎の繪魚の繪描きて永き日を子に見すること  
ややあぢさなし

ふるさとの幼なじみを思ひ出し泣くもよかる  
と來る來るとんぼ

やはらかに心の濡るる三月の雪解の日より紫  
を着る

西大寺など云ふ寺の大門に今立つ如しよき入、  
日かな

こゝちよく橄欖色の透きとほり身に流れ入る  
すいらんの花

戀もせじ人の恨みは負はじなご唯事として思  
ひし昔

夕立のしぶき吹きこむ歌舞伎座の廊下に語る  
杵屋のおろく

紅き點金の點をば日をおきて打ちに行くなり  
しろき心に

千葉の海干海の砂につばくらの影して遠き山  
のはれゆく以下十二首上總下總は遊びて

一四  
薬積みて新造船の腹を繞く街のうしろのほの  
ぐらき川

中空に人のましろき背に似たる燈臺見わし松  
原の道

岩鼻の燈臺を見る何となく今死の苦よりのが  
れし如く

岩のくぼ濱豌豆の花咲きぬ久方の雲おちちれ  
ること

芍薬の花より艶にあかばみぬ雨のはれ行く刀  
根の川口

黒き家灯のともる時旅人は涙こぼしぬ川のこ  
なたに

一六  
刀根の川さゝ濁りして初夏の日のくれ行けば  
船の笛鳴る

川口の初夏の雨はなやぎぬ對岸の灯と戀をす  
ること

真菰伏すかせにまじりてはしきやし香取の宮  
の大神はある

たはぶれに青き真菰の葉を組める指ちかく來  
る川あきつかな

かさつばた香取の神の津の宮の宿屋に上る板  
の假橋

無くもがな世の亡ぶ日も氣のふれし母をわが  
子の目に映す日も

何ぞなくよりごころなく思ふ日の三日四日ありて衰へしかな

絶間なくそのかみの夢見ることを何にもまして哀れがりける

みなぐさめ三たびさけども知らぬごと涙ながすは死ぬべき性ぞ

青き蘆人をおほひて伸びたりと蚊帳を眺むる  
明方のわれ

椿踏む思へるところある如く大き音たておつる憎さに

消息の往來やがてふつと絶ゆ人間の子は知らずその外

初秋は王の畫廊に立つごとし木にも花にも金粉を塗る

かたはらに源氏の君のそひふしてあるを親見  
しいつぞやのこと

大いなる鬱金のひと葉日に透きて散る時われ  
も舞はまほしけれ

竹杖を地に横たへて額づける乞食を隔て砂風  
ぞ吹く

たやすげに死なんと誓ふ若人もありのすさび  
に哀れとぞ思ふ

七つの子かたはらに來てわが歌をすこしづつ  
讀む春の夕ぐれ

水色に塗りたる如き大ざらと白き野菊のつづ  
く路かな

ことごとく因縁和合なしつると思へる家もど  
きに寂しき

誰が見ても戀しくなれと云ふやうに若衆かづ  
らを君被く時

振袖の従妹と伯母とにぎはしく送られて来て  
序の幕あきぬ

わが戀のめでたきことを思ふ時おつる涙の煽  
のしづく

戀人を遠きにやるはうけれごももの思ひをば  
ならはんわれも



男行くわれ捨て、行く巴里へ行く悲しむ如く  
かなしまぬ如く

海こわて君さびしくも遊ぶらん逐はるる如く  
逃るる如く

秋の草みなしるがねの竹に似ぬ野分の通るむ  
さし野の原

初戀の日よりつづきてめざましき心の如き紅  
蜀葵かな

はかなしや天女の髪も秋くれば落つと云ふな  
りわがひとり言

うすぐもり青き八つ手の濡れたるがこころわ  
るき日三日四日となる

たをやかに笑ふ女の絲切齒しろく尖りて涼し  
さの湧く

雨を吹く隙間の風にあぢきなく濡れて戦げる  
蚊帳の裾かな

見て足らず取れども足らずわが戀は失ひて後  
思ひ知るらん

さちがひか繼子ごころか情てふものにことごと  
うらかくごとし

わが取れる紗の燈籠に草いろの袖をひろげて  
來る蠶螂

七八とせ京大阪を見すなりぬ遠き島にも住ま  
なくにわれ

猪と鼠立ちて歩める繪の狀に春が伴れくる田舎人かな

× さくら散るわが來し方と共に散る涙とともに  
雨まじり散る

花引きて一たび嗅げばおとろへぬ少女ごころ  
の月見草かな

ものの列來るを見れば横ざりぬそのことをい  
と派手に思ひて

東京に雪雲くれば遠方をふたがるごとと急ぎ  
文かく

わが太郎色鉛筆の短きを二つ三つ持ち雪を見  
るかな

光明を恐れてすなるすさびとも眠れる人を思ふなるらん

あめつちの中にただよふ悲しみをわがものとして親しむ夕

君と居て百とせなほも憂へすとささやくは誰石の湯槽に

眉引かす香油を塗らぬ素肌をばめでたく映す掛鏡かな

湯槽にてわが枕する腕は望の月夜も及ばぬものを

夢いまだ多きが如し春の湯にうつりて匂ふ我のまなざし



われは猶博士の庫の書よりも己を愛で、黒髪  
を梳く

たそがれの光もわれの身に添へば悲しさばかり  
めでたかりけれ

みづからを愛でんと我は白鳥に身をば假れる  
や春の湯の海

しら鳥の背を隠さんと水色の帳を引けば青空  
に似る

×この白き胸を自ら刺し通す狂亂の日のありや  
あらずや

山川に踵をひたす夏のごと石だたみをば水の  
ながるる

たはぶれに眉をひそめぬ自らの素肌を抱く寒  
き女と

夜の色ともしびの色湯の霰によき寝つくる愁  
をつくる

悔むべき戀もなき身に何事ぞ湯槽にかくれ涙  
あらふは

粉黛のこちたきことを厭ふ人泉の如く湯を好  
むわれ

木の下に落ちて青める白椿われの湯浴に耳を  
かたぶく

湯槽をば水晶宮になぞらへぬありて耻なき身  
の清らさに

かたはらに 匿<sup>かく</sup>進<sup>すす</sup> 咲<sup>さ</sup>くと 誰<sup>たれ</sup>云<sup>い</sup>ふや 湯<sup>ゆ</sup>槽<sup>せう</sup>に 浮<sup>う</sup>ぶわ  
れの 圓<sup>まる</sup>肩<sup>がた</sup>

三六

森<sup>もり</sup>に 似<sup>に</sup>る 青<sup>あお</sup>き 坂<sup>さか</sup>壁<sup>かべ</sup>つや 好<sup>す</sup>くも 静<sup>しず</sup>かに うつす 燭<sup>しやく</sup>  
と 素<sup>す</sup>肌<sup>はだ</sup>と

ふくよかに 身<sup>み</sup>の 若<sup>わか</sup>きこそ めでた けれ 蓄<sup>たくわ</sup>薇<sup>い</sup>をも

つまじ 煉<sup>ねん</sup>の 傷<sup>いた</sup>めん

散<sup>ち</sup>るも 解<sup>と</sup>け

湯<sup>ゆ</sup>を出<sup>だ</sup>し 真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>き 魚<sup>いさな</sup>の 嗅<sup>か</sup>ぎより ぬ 玻<sup>は</sup>璃<sup>り</sup>の 器<sup>うつは</sup>の 金<sup>きん</sup>  
蓮<sup>れん</sup>の 花<sup>はな</sup>

ほの じろき 霧<sup>きり</sup>の中<sup>なか</sup>なる うまご やし 人<sup>ひと</sup>踏<sup>ふ</sup>む ころ  
の あけがたの 夢<sup>ゆめ</sup>

三<sup>さん</sup>尺<sup>じやく</sup>の 柳<sup>やなぎ</sup>を 折<sup>を</sup>れば 大<sup>おほ</sup>馬<sup>うま</sup>に 春<sup>はる</sup>は 女<sup>をんな</sup>もの らまほし  
けれ

三七

白き墓いつにてもあれ安らかに寝に行くを得  
る床とおもひぬ

大いなる支那の地圖をば掘げ見る男の傍に白  
蠟を焚く

舞姫のおしろいするも寒からん京の秋かせ川  
よりぞ吹く

少女のHあたり近くもよせざりしそのあやか  
しの友となりなき

色白のおしゆんが刈れる萱の葉の光るも涼し  
馬の背より

生來の二重の心二やうに事を分くるがこころ  
よきかな



何ごとか病める蠶の冷たさに胸薄じろくも  
る夕ぐれ

四〇

わかき友さかつきを見て何泣ける破れし戀と  
酒と似たるや

日つれなくも物思ふ間にたけのびて悪しき匂ひ  
を立つる雑草

左右より胡蝶の羽を背に負へる子役のいでて  
笛ひゆうと鳴る

雪積もる深夜の街の道具立よこにまはりて君  
ちらと見ゆ

いづこへか逃れんとして逃れ得ぬ重きこころ  
に大ぞらを見る

四一

悉しとは足らへる際に云ふことぞ與り知らず  
目の外の人

彼の人を暫くわれの憎みしは暫くわれや戀し  
たりけん

短命はすでに知りたる人と云ふおのれともな  
くめでぬ鏡を

薔薇咲くしろくはた黄にうす紅に刑の重きは  
墨色に咲く

影の國黒き氷を出できたりわれをば掩ふ蝙蝠  
の翅

門に干す刈草の葉にまじりたる釣鐘草もかな  
しかりけれ

刈草の青白きをば嗅ぐ如くわれを思ふや三十路してのち

水盤に紅おとすよりあてやかに早くひねる星月夜かな

甘き味ほのかに残り憎からぬわれの酔ひざめ君の酔ひざめ

X やうやくに思ひあたれる事ありや斯くものをとふ秋の夕風

玻璃を滴る花ゑんごうの柔かき緑のしづく脂のしづく

徹にほふ衣桁の衣を被くとき雨を憎みぬ繼母の如

われすでにあたはずと云ひ人々に一尺すさり  
ものをこそ思へ

砂に居る鴨の如くに額たれて人言のみを聞く  
ははかなし

旱月來ぬうす黄の棕櫚の花落ちて池の濁れる  
旅の宿かな

秋來ぬと白き障子のたてられぬ太鼓うつ子の  
部屋も書齋も

× 見るところ世を樂むに似たれども悲しきこと  
を背後にぞする

この君かさも類なくさきたりし人はと云ひて  
知らぬ子の泣く

霞より早く羽より軽やかに心をわたる淡きかなし

なほさめぬ夢の女とささめきてわれを見返るこのも彼のものに

あらましは君に染まりぬわが心うらなつかしきものとする頃

人ごみのうしろに低く瓜だてて若き俳優に花なぐるかな

近き家いと悲しげにこちたくも香焚く日なりうぐひすの聲

びろうごの薄青色の机かけわが目のみ見る春のひるがた

南かせ塵を上ぐればいみじかる初夏の日も灰  
色となる

たなばたの星も女ぞ汝をおきて頼む男はなし  
と待つらん

三十路しぬ妄想邪見ややふかくなるとも知ら  
ずたのまる君に

よき事に何をえらぶぞ君を見てあらむ命のつ  
づくをえらぶ

きさらぎの雨となるともきさらぎの雪となる  
とも寝てあり給へ

少女子の遣羽子の音久方の照日の神も佐保姫  
もさく

いまはしく指のきたなき彼の座頭變化のごとし曲弾をする

京の子の小肩をこえてちる時に板屋紅葉は匂やかに見ゆ

彼の人にいたはられましこの人に小鳥の如く養はれまし

鉢のもや一尺ばかり紅く這ふ花ゑんごうの薄あかりかな

あら磯の犬吠岬のしぶきをば肩より浴びてぬれしかたびら

いにしへのさびしき人もかくしけん蓬生に居て大空を見る

わが脛に知らぬ男の足觸れし驚きをして泥を  
憎みぬ

五四

くるくると器械まはれば黄なる埴鉢のかたち  
すあぢきなきかな

春くれば古きすだれも夕雲のにはへるまへに  
そよぎこそすれ

× 近き日に何の來るをゆめみけん十とせのまへ  
のうつしゑの人

むらさきの帳を背にして獨居ぬ飽くなき心す  
こし鎮まれ

たそがれの硝子障子に映りたる濡れし鬱金の  
ひともと銀杏

五五



蟪蛄の音よ平野次郎が獄屋にて弾きたる紙の  
琴に似るかな

生れ来て一萬日の日を見つつなほ自らをたの  
みかねつも

大いなるツアラストラの蔑みし女の中なかにわ  
れもあるかな

驚おどろきて黒き瞳ひとみをわれ見はるツアラストラに耳  
を貸しつつ

金の蛇へびこちよきかな身を咬かみぬツアラス  
トラの杖つゑを離はなれて

板屋根いたやねを野分ののりの風かぜの剝はぎしより空そらの覗のぞけるあ  
ぢさなき家いへ

きのふけふ塵に染みたる糸くづと見るまで萩  
のあはれになりぬ

すすきより萩の花より何よりもわがまづぬる  
る秋の露かな

あらむこと残り少なきこちしぬ日のあかき  
晝月しろき夜

沖つ風吹けばまたたく蠟の火にしづく散るな  
り江の島の洞

鶴の鳥かき消す如く立ち去れば小波もなき黄  
昏の海

病むわれのたよりなげにも歎く時かたへに慄  
ふ櫻草かな

身ごもりしより

十界に百界にまだ知らぬこと一つあるごとし

身ごもりしより

不可思議は天に二日のあるよりもわが體に鳴る三つの心臓

この度は命あやふし母を焼く迦具土ふたりわが胎に居る

生きてまた歸らじとするわが車刑場に似る病院の門

己が身をあとなく子等に食はれ去る蟲にひとしき終ちかづく

男をば罵る彼等子を生ます命を賭けず暇あるかな

2 pas

大雪に枕すること生きながら岩に入るごと白  
き病室

悪龍となりて苦み猪となりて啼かすば人の生  
み驚きかな

親と子の戦ふはじめ悲しくも新しき世の生る  
はじめ

蛇の子に胎を裂かるゝ蛇の母を冷たくも時  
の見つむる

胎の兒は母を噛むなり影のごと無言の鬼の手  
をば振るたび

その母の骨ごとごとく碎かるる苛責の中に健  
き子の啼く

あはれなる半死の母と息せざる兒と横たはる  
薄暗き床

虚無を生む死を生むかかる大事をも夢さうつ  
つの境にて聞く

死の海の黒める水へさかしまに落つるわが兒  
の白きまぼろし

よわき兒は力およばず胎に死ぬ母と戦ひ姉と  
たたかひ

あはれにも母の命に代る兒を器の如く木の箱  
に入る

産のあと頭つめたく血の失せて氷の中の魚と  
なりゆく

産屋なるわが枕邊に白く立つ大逆囚の十二の  
柩

血に染める小き雙手に死にし兒がねむたき母  
の目の皮を剥ぐ

間を置きて荒く鼓弓を擦る如くうつろの胎の  
更に痛みぬ

みづからを苦むるをば恥とせし我も苦む母の  
習ひに

メいでわが兒幸あれと先づ洗ふ母が身を裂く新  
しき血に

メ母として女人の身をば裂ける血に清まらぬ世  
はあらじとぞ思ふ

流れつゝ蘆の根などに寄る如く産屋に冷わて  
衰へしわれ

打つ筈に血の走るまで糺されて悔いざりし如  
蘇りさぬ

うばたまのわが洗ひ髪ちらし髪金の襖子にふ  
る初夏

開山の法師よりけにたふとばれ戀の話をさく  
人となる

秋のかせ口を窄めて噴水盤のうす紫の水を吹  
くらん

たをやめの胡蝶の舞を見さしきて白き露臺の  
雨を手を受く

をりをりに黄なる粉ちらす菘椿彼も泣くらん  
醜き椿

水色の秋のあけぼの大海の真白く塗れる船に  
有らまし

澄みとほるあまき涙を海として黒髪をひく白  
き魚われ

秋來りものに抗ふ心さへ薄紙の如濡れにける  
かな

われ昔さびしき事を戀と云ひ樂しき事を死ぞ  
と思ひし

かきつばたわれのやうなる氣隨者眉ひそめつ  
つ人見るに似る



何の木か小枝がちなる影おとす寒き月夜の街  
の敷石

七二

雲流るおほくの人に覗かれてはや書をする文  
の如くに

八月の雨ならばいとよからまし瀬の音なれば  
人のしのばゆ

ここちよく高く風鳴る一もとの楡のもとを歩  
むあかつき

おのれをば守る力のなきやから黒がねをもて  
よろへるやから

しめづらかに怖しく將た嬉しかる男の息のひな  
げしの花

(三)

大きな百合の落つるは艶めかし我のわかる  
の去るにくらべて

あながちに忍びて書きしあを見ればわが文な  
がら涙こぼるる

あかつきの竹にとまりて蟬なきぬわが鏡より  
出でし心地に

ひなげしの赤さと粗さ矢がすりの御納戸うつ  
る花皿の水

飾らざるわがまごころの素直さをあらはに人  
の覗くさびしさ

思へるは片戀ながら自らは塵もすゑじとなす  
人はよし

この内にメツザの楯を入れおくと傍の櫃を指  
さしぬわれ

わかみどり柳に隠れ手を拍てば男の覗く紺納  
籠かな

床几より足を垂れたる舞姫の前に絹ひく加茂  
川の水

寛弘の女房達に値すとしばしば聞けばそれも  
うとまし

薇薔咲きぬかつて夢寐にも知らざりし思ひこ  
とする人のほとりに

ゆかしけれものの哀れを知る群に入れ餘され  
て過ぎし年頃

めでたきもいみじきことも知りながら君とあ  
らむと思ふ欲勝つ

春風も冷く吹くは白蘭の花のあたりに黄なる  
香焚く

吾妹子がくるぶし痛む病ひして柱によればつ  
ばくらめ飛ぶ

わが前に入らひろげぬなつかしき茜もめん  
の  
大阪なまり

わが世をばよろこぶなりと風吹けば髪も柳も  
おなじこと云ふ

あけくれの鶯の聲さらさの春の面にうさば  
あをする

八〇  
旅にある君かへるよりまさること未だ知らざ  
る身を祝ふかな

青き木よいつまで立つぞ青き木は枯れし木よ  
りも傷ましきかな

常磐津の連中ほむる姉たちの知らぬ文書くふ  
ところ紙に

男衆にふところ手してもの云へるうき人に逢  
ふ初日の樂屋

木戸へ行く茶屋の草履にうち水のしぶきのか  
かる夕月夜かな

一しきり花碗豆の風おくる涼風ふきて廊のく  
れゆく

何ごごに思ひ入りたる白露ぞ高き枝よりわな  
なきてちる

あるかぎりことをこのめる中に居てひとりす  
なほに戀もつぐりぬ

時にふと思ひせまりて息つくも十とせに餘る  
われのならはし

若き日は盡きんとぞする平らなる野のにはか  
にも海に入るごと

契らねど衰へは奈ぬ何となきうらはかなきを  
われに知らせて

吉原の火事のあかりを人あまた見る夜のまち  
の青柳の枝

蝶ひとつ土ほこりより現はれて前に舞ふ時君  
をおもひぬ

水草に風の吹く時緋目高は焼けたる釘のこ  
ちして散る

× 棕櫚の葉のみづから高さ悲しさよ小草の知ら  
ぬ風にはためく

草もなき赤土原の干割れしを越えて塵に上る  
夏の日

棕櫚の葉も蓬の莖もちかたに雷鳴れば砂を  
こぼしぬ

辻ごとに黒き服着る旗振が電車に載せて夏を  
撒くらん

鱈<sup>たか</sup>などの暑<sup>あつ</sup>き干<sup>ひ</sup>渴<sup>ど</sup>にのこされて死<sup>し</sup>を待<sup>まち</sup>つはか  
り寝<sup>ね</sup>ぐるしき床<sup>とこ</sup>

かすかすの心<sup>こころ</sup>の難<sup>がた</sup>に勝<sup>か</sup>ちし身<sup>み</sup>も疲<sup>つか</sup>せて細<sup>ほ</sup>りぬ  
夏の來<sup>きた</sup>れば

わが知<sup>し</sup>らぬ砂<sup>すな</sup>漠<sup>ばく</sup>の風<sup>かぜ</sup>の身<sup>み</sup>を吹<sup>ふ</sup>くと夏<sup>なつ</sup>を歎<sup>なげ</sup>ちぬ  
草<sup>くさ</sup>のいきれに

日<sup>ひ</sup>のささぬ蔭<sup>かげ</sup>にわが子<sup>こ</sup>を寝<sup>ね</sup>さすれば足<sup>あし</sup>の方<sup>ほう</sup>よ  
り晝<sup>ひる</sup>も蚊<sup>か</sup>の鳴<sup>な</sup>く

射<sup>ひ</sup>干<sup>く</sup>の赤<sup>あか</sup>き花<sup>はな</sup>より油<sup>あぶら</sup>ぎる蜥<sup>こも</sup>蜴<sup>ひ</sup>の背<sup>せ</sup>より夏<sup>なつ</sup>のひ  
るがる

齒<sup>は</sup>さしりをする子<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>く夜<sup>よ</sup>の樹<sup>き</sup>にぎと短<sup>みじか</sup>くも  
啼<sup>な</sup>きて止<sup>と</sup>む蟬<sup>せみ</sup>



わが嫌ふ男ならねど夏こそは深くあくどくいと苦しけれ

小き文脈におさへて云ふことのよし悪心のこのうつはもの

わがつねに心に覗く洞穴を出しが如き黒き蝶かな

こほろぎは床下に来て啼く時にちちこひしなごおどけごと云ふ

枝などを髪かみの如ごとくにうち亂みだし流ながるる木きあり大河たがの雨あめ

人並ひとらに父母ちちうはを持つ身みのやうにわがふるまをどひ給たまふかな

自らを淡き黄色にかはりゆく秋の草とも思ひ  
なすかな

かしこさよ御裳裾川の板橋をわが踏む音のこ  
だまする朝(以下八首伊勢志摩に遊びて)

天てらす神の御馬にわが子等が豆を食まする  
朝霧の中

夕月のひかりの如くめでたきは木立の中の月  
讀の宮

祈らくは豊宇氣の神貧しかる我等が子にも糧  
を足らしめ

曇りたる沖をながめて涙おつ心さびしや伊勢  
の海邊に

ものふりし鏡ならねを静かにも二見の浦は雨  
に曇りぬ

少女子の櫛笥の中を見るごとく小船のならぶ  
鳥羽の川かな

出で行くや港に入るや知りがたし島づたひす  
る阿磨人の船

かりそめの物語より涙おつ病めども心をどる  
人かな

をりをりに心の夢をくらくする雲の陰影あり  
秋の日の如

荒縄のたすきをしたる門ばしら撫でてくぐれ  
ば雨がへる鳴く

こすもすと紅きだりあど雨に濡るみだれしま  
まに刈らぬ草むら

幾どせも仰がでありし心地しぬ翡翠の色初  
秋の空

毛氈のはねす色をば木の下の床几に敷けば蝸  
の啼く

あたたかき砂を手に戴せうつつなく語れる人  
に馴れてよる鶴

箆を着て図書館まへの大河を船人のぼる水無  
月の雨

戀をしぬ日毎忘れず泣きうべき身にしむこと  
を君に聞かむと

× 流俗とたたかひ番ふ日とならばこの超人と  
もに勝たまし

春過ぎて木蔭に小く咲きいでぬ末の子に似る  
山吹の花

二月の朝鴉啼くみやしろの青き瓦にあられふ  
るどき

わが閨の朝日に似たる紅硝子窓にはりたる山  
の馬車かな

黒き雲愛宕の山の上にて人おびやかす秋の  
ゆふぐれ

世につかす人を頼まずありてさへわれあさま  
しと見る日もありぬ

一切をやや明かに見透す日われに來りて物足らぬかな

蜘蛛の巢にしら露おきぬ二三本竹のなびくも藪ごちする

秋の風かの來るとき戀さめのくらさ冷き顔見ゆる風

かなしくもわが子の指にはさみたる蝶の羽より白き粉のちる

腹立ちて炭まきちらす三つの子をなすにまかせてうぐひすを聞く

若き人年を知れるとややたけて年忘るるといづれもよろし

もの書きぬうす手の玻璃に萎れたる黒きだり  
あをかたはらにして

そぞろなる夜の心にかび来るだりあの花は  
わりなかりけれ

なほいまだ若きよはひを惜しとしぬ戀するこ  
ともこの心のみ

風吹けど花みじろがぬうす紅の椿はかなしわ  
が墓のごと

今ひとたびわれを忘るる日はなきや親のいさ  
めし戀の如くに

君たちの知らぬ國よりわれ來ぬと云ふべきこ  
とを今は言はまし

秋が着る素足のすその裏葉色清らにつづく廊  
を行く

初秋のあらしの中にうなづきぬ孟宗竹の黄な  
る末など

かふと蟲玉蟲などを子等が捕る楠の木立の初  
秋の風

ひんがしの國のならひに死ぬことを譽むるは  
悲し譽めざれば悪し(以下晩歌十三首)

勇しき佐久間大尉とその部下は海國の子にた  
がはずて死ぬ

瓦斯に酔ひ息ぐるしとも記しおく沈みし艇の  
司令塔にて



大君の潜航艇をかなしみぬ十尋の底の臨終にも猶

武夫のころ放たず海底の船にありても事と  
りて死ぬ

海底の水の明りに認めし永き別れのますら男  
の文

水漬きつつ電燈さねぬ真黒なる十尋の底の海  
の冷たさ

海底に死は今せまる夜の零時船の武夫ころも  
濕ふ

大君の御名は呼べどもあな苦し沈みし船に悪  
しき瓦斯吸ふ

いたましき艇長の文ますら男のむくろ載せた  
る船あがりさぬ

やごとなき大和だましひある人は夜の海底に  
書置を書く

海に入り歸りこぬ人十四人いまでも悲しき武夫  
の道

髪白き生田小金次先生は佐久間を語り春の日  
も泣く

いつしかと若き心にまかせたる身は三十にな  
りぬあさまし

うらさびし圓覺寺にて摘みし花かざせしさま  
に君と歩めば

錫となり銀となりうす赤きあかざの原を水の  
ながるる

羽負ひて登天の日のこちする小雨まじりの  
初夏の風

初夏のあかるき緑やはらかにわが病む床のし  
ら布を吹く

ほのかなる紅絹の色かな夜に祈るギリシヤ教  
の寺の灯の如

切岸を雨にすべりて洲に立てる秋の雑木もあ  
はれなるかな

衰へと云ふこの報ひうくるより苦しきはなし  
戀の終りに

新しきわが生涯をきづくとして心にたてし圓ば  
しらかな

ふきあげの盤よりなびく水の音静なるこそ悲  
しかりけれ

幽霊はまだ消えずやとうつぶしの稚兒輪が云  
ひぬ島田の膝に

悲しさをまぎらはさんとくだものの皮むく七  
間の白き指かな

うつむきて六二の楯にも書けばかのさじき  
より人のごよめく

秋の夜の灯かけに一人もの縫へば小き虫のこ  
こちこそすれ

馬上より垣の柳を人摘みぬ駿馬の骨を摘めと  
云はまし

木蓮のしろき花びら物とせず惜げに散す瑠璃  
色の蜂

何にてもねらばで其れに絶るべき弱き心を十  
年鞭うつ

わが生みし第一の子は病みがちに清く細りぬ  
天の身ならん

×  
かき抱きともに玉とも變るべき不思議は無き  
か此子死なさじ

×  
病むを見て子に謙る親ごころ懺悔の如き涙な  
がるる

代れるか親の受くべき禍に我兒は病みて清く  
瘦せゆく

清らにも我兒の病める悲しさよ水の底なる月  
のここに

さし覗きこの兒死なんと咽びけり病みてあは  
れに瘦せし寝姿

手にとれば青玉をもて刻まれし虫のここに  
青きすいつちよ

鎌の刃のしろく光ればさりぎりす茅萱を去り  
て蓬生に啼く

大世界あをき空より來ること蕾をつけぬ春の  
木蓮

秋の島奥の方より水はこぶ白き桶などこころ  
よきかな

秋の日の夕となればわがうれひ君がこころに  
まつはりて這ふ

魚市のかがりの煙更けし夜の港になびき白き  
露ふる

天王寺田舎の人の一つ撞く鐘の下より涼かせ  
の吹く

狂亂に近づくわれを恐るるや蝶もとび去る髪  
をかすめて

なでしこの花咲く頃となりぬれば人目をしの  
び文書くわれは

二つ三つ忘れぬこと書きこして心の上を走り行く人

渚なる廢れし船に水みちて白くうつれる初秋の空

指をもて濁き空にや書きすてんこの國の人忌むと云ふなり

冬の手に裂かれて落つる金の箔ひと葉ちるなり  
二葉ちるなり

東大寺二王の門を静かなるうす墨色にぬらす  
秋雨

人のする初戀なども耳とまり秋はものみな哀れなるかな



生いきながら身みの棄すてらるる心地こころしの岩い代しろ山やまの  
雪ゆきよけの底そこ (以下三十三首岩代に遊びて)

雪ゆきよけの板いた屋やくづれて草くさの葉はの裏うらひるがへり  
山やまの雨あめふる

磐いわ梯はしの山やまをとどろと鳴なし來きてみづうみに入る  
白しろき横よこ雨あめ

山やま海うみの驛やきにわが見みるみづうみは譬たとへば白しろき肘ひじ  
の片かたはし

岩いこねて三さん筋しんに裂きくる白しろき瀑たきとどろと鳴なりて  
山やまに霧きりふる

ひと時ときも千ちとせもなしと教しへ居ゐる琅ろう玕かん洞どうの水みづ  
の音ねかな

湯上川ここに日を経ば衰へて身を隠すとや人の云はまし

人言はさもあらばあれ湯を愛でてさもあらばあれ山に日を経る

初秋の湯上の山の朝風に水を過りて雲のふかるる

わが背子と夏の旅路にやつれ来て今日みそぎする岩代の山

みづからを山の湯ふねに朝くだる白き雲かと驚きぬわれ

美しくしや會津の山の湯上川ちさき板橋ちさき舞姫

みやびをとたわやめのみの渡る橋宿屋の門に  
ひとつある橋

湯上川たかき欄を背にしてつづみの紐をむす  
ぶ舞姫

山あひに管玉などを置くと見る湯上の川の瑠  
璃色の底

湯あみしてやがて出じとわが思ふ會津の庄の  
ひがし山かな

半身を湯より出して見まもりぬ白沫たてる山  
あひの川

自らを清しとすれど猶あかず會津の山の湯を  
愛でて浴ぶ

川底のろくしやう色の板岩に白き裳引きて躍る水かな

一三六

谷底の湯槽に近く鳴る水を遊べる魚のこころして聴く

ましろなるわが身をめぐり湯の湧けばいかづち伏せてあるこころする

憎くげなし湯槽になるとなるあなぐらに似る小座敷の三味線の音

あけがたの山の巖間の湯にあれば近き雲より小雨そぼふる

溪川の岩のくぼみの水だまり星座のごとく見ゆる朝かな

一三七

山の雨ころもを濡し葛の花人にまどひぬあか  
つきの谷

花かざし今水姫があそびごとする灯の川とな  
りにけるかな

山黒く暮るれば谷の二側に白き流れをてらす  
ともし灯

湯上川わが今日おとす美しくしき涙もまじる水  
の音かな

飯阪のはりがね橋にしづくしる吾妻の山の水  
いろの風

吾妻山うすく煙りて水色す摺上川の白きあな  
たに

わが浸る寒水石の湯槽にも月のさし入る飯阪  
の里

一三〇

山の湯にわが圓肩のうつれるをしるき月夜と  
思ひけるかな

山の湯に浸りて何を思へるやなほ美しくしき戀  
を思へる

煤びたる太き柱に吊りわたす蚊帳に入りくる  
氷の音かな

見つつなほもの哀れなる日もありぬ逢はで氣  
あがる日もありぬわれ

元朝やわか水つかふ戸に近き柳の花に淡雪ぞ  
ふる

一三一

おさへ居し手のひらぬけて五つ六つ目の前に  
舞ふかなしみの蝶

草の庭まへに見ながら飯を食ふ男おもひぬ逢  
ひにこぬ時

世に知らぬ千年の寒さ身を噛みぬわが脰まげ  
てひとり寝る床

麥の穂の黄ばめる上にももの葉の裏見ること  
き海の色かな

いづ邊へか行き隠れんと思ふこと瘡病のごと  
くなほする

たのしみのまた来る日をあたへよと訴へぬ子  
は衰へにけん

夏となり銀のどんぼの飛びくれば忘るる日な  
しかの人のこと

あな涼し大雨の中の木立をばわれの心のはし  
り行く音

折ふしに悪をほごこす心なごわが未の世にを  
かしからまし

芝居よりかへれば君が文つきぬわが世もたの  
しかくの如くば

水無月の夜にして早も啼く虫のやさしき聲の  
うすみどり色

藤の花わが手にひけばこぼれたりたよりなき  
身の二人ある如き



自らを先づ驚かすことするとこの衰へをつくるならねど

足らぬこと無しと知れども涙おつうらはかなさや病ならまし

剥がれたる木の皮などの泣く音かと木立の蟬をかなしめるかな

小蒸気が橋の下にて笛吹くも物のはすみに泣かまほしけれ

棕櫚の花魚の卵の如さをばうす黄にちらし五月雨ぞふる

わが背子が行く日近づく海こえて若しかへらすばかなしからまし

海こねて所さだめすわが背子と流れて遊ぶ身  
ともならまし

百舌鳥啼けば火のつく如く過失をせむる男の  
こはき顔見ゆ

心臓にわが顔つけて吸ふは血か魔薬の液か熱  
じくるはし

金屋に人なき時は春の日も秋にとなれる思ひ  
こそすれ

かちわたり波かしたたり足もじる危ききはに  
夕風ぞ吹く

うき草の中より魚のいづること夏木立をば上  
りくる月

鳥瓜からうりたよりなげなる青あおき實みのひと一つかかるとさ  
びしきものを

せはしげに金かねのどんぼのとびかへる空そらひやや  
かに日ひのくれて行く

黒馬くろばのながく伸のせる首くびすぢのつやつやとして  
萱あしはらの露つゆちる

大和川やまとがは砂すなにわたせる板橋いちはしを遠とほくおもへと月見  
草くさ咲さく

われ早はやく重おもきいかりを身みにおひぬ樂たのしき戀この  
底そこにしづめと

大空おほぞらにあそぶが如ごとく折を折をに虚無むじなに羽搏はねうてば健た  
きかなわれ

初秋の一重の衣涼やかに風の通るも戀に似る  
かな

かの刹那この刹那いとおもしろくいと狂ほし  
くいと悲しけれ

夜もなほ籠のあたりに灯をおけば金絲雀は啼  
く旅人のごと

七尺の簾を透きて白百合のそよぐ夕にわたる  
いなづま

狂ほしき黒髪をもて絡みたる心の巢より紅き  
鳥啼く

腕をみづから枕さて雪山の流れと聞くもここ  
ちよきかな

ものの蔓あかざまじりに枯殊る築土の内なた  
んぼの花

光氏が淺草寺の擔したに袂をしぼる水無月の  
雨

ひと時の盛りと云はむ中にあり世をみな夢と  
思ふたぐひに

朝夕こころにみたすと思ふこと多くなれるも  
おとろへしゆる

戀人どもの云ふ如く立ちながら手ずさびに引  
く青柳の糸

店さきに住吉をどり傘の柄を叩く音より夏の  
ひろがる

わが姿いまだ人見す火の柱のみ見ゆと云ふあ  
さましきかな

ある人もある書も皆華やかに戀をとりなしわ  
れを教へし

さし櫛はおちて後に音たてぬ心に代り高く泣  
くらん

知恩院の高き屋根よりわが髪に皁月のしづく  
青やかにちる

街々はうす黄の菊のさびしさに早くも似たり  
十月の末

自らをもて證さんと思ひ立ち寒き不思議に入  
りにけるかな

いかばかり光る玉ともわれ知らず人探らば探  
れ人棄てば棄て

紙を切る細き刀物も何となくすすまじきかな  
夜を一人居て

戀さへもわがなすすさに飽きたらぬ心の奥の  
心としりぬ

かの人にかかはりなづむ心をば今知るがごと  
頬の染まるかな

青玉の涙ながれて川盡さすわれは其處より棹  
さしてきぬ

雨白く土をあらへば瀬戸かけの藍の模様のみ  
かる夕ぐれ

杏の實うすく赤める木の下に砂を流せるあけ  
がたの雨

ともすれば久しく座して思ふこと青き御空の  
額に落ちこと

あめつちを生うけの親とも云はずして夜晝ひるにおも  
ふ山のおくつき

君やがて草踏む靴の寒げなる音を憎みてかへ  
りこしかな

明星も白き小石こいしにしかめやと手のひらに置き  
かたらふ夕ゆふ

戀をわれ断たれ易やすき火とおもはねど抱かかきつつ吹  
く身のこぐるまで



うす赤きすゐいとびいの花の呼吸湯氣より熱  
きここちするかな

夕ぐれの夕ぐれのかの笛の聲ほどふるままに  
わりなく戀し

ひと時にわかき命を燒きつくせ斯く呼ばはり  
て行くにかあらん

高き屋に朝々のぼり遠かたの木蓮の花見る日  
となりぬ

吹き來り室に入る時秋の風わが面見てあな寒  
むと云ふ

秋の來てとうしみとんぼ物思ふわが身のこと  
く細り行くかな

しろき月木立にありぬうらわかき男の顔のぬ  
れし心地に

かば色のつやよく長き頸のべて麒麟の食める  
あかしあの花

小さ手を横に目にあて泣く時はわが兒なれど  
も清しうつくし

あぢきなく石につまづく心地して俄かに切れ  
し三味の絃かな

青磁の器水たたへたりわれ死にて行く國浮ぶ  
こころこそすれ

あなさびしこの邊には人なきか人はあれども  
未だ夜明けず

他くをもて戀の終と思ひしに此さびしさも戀  
のつづきぞ

娘にてここに得たる病より瘦せの瘵はざる  
愛身なるかな

筆とれば涙おちきぬ指瘦せてふるるに似たり  
枯木と枯木

前髪を焰のごとくちぢらせぬ戀にかかはる執  
着のため

水色の朝顔に似て板敷のつやにうつれるわが  
たもどかな

この國のはてをさまよふこちすれ旅人おく  
り京にきつれば

相あるを天變さとし人騒ぎ君は泣く泣く海わたりけん

とく消ぬぬ人ねたますや大船に二人乗れりと思ひし夢も

片ときも立ちはなれずてならひしは昨日のわが世こし方のこと

君行きてたのもしげなくなりつると心みづから蔑むはわれ

いと重き病するなりわが心君ありし日におもひくらべて

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らしめメヅザの神よ

一人行くを深き心のある人と君をたたへぬゆるすべからず

しろがねの小さい蛇が夜も晝も追ふべき君が大  
海の船

逢見ねば黄泉ともおもふ遠方へたからの君を  
なごやりにけん

わが起居涙がちにてあることも旅なる人の皆  
しれること

憂ふるやはたよろこぶやわが君にかかはるこ  
とのいと遙かなる

おのれこそ旅ごころすれ一人居る晝のはかな  
さ夜のあぢきなさ

月たれば日へなば妬き話さへもり聞くべしと  
はかなまれつつ

海こわんいざや心にあらぬ日を送らぬ人さわ  
れならんため

人皆がかしこまりおき居すなりし彼の船室の  
一二分ほど

おもひそふ湖北漢朝元年の支那にて書ける君  
が消息

一人てふならばぬこち今日になるするが  
なしさかぎり知られず

あぢきなく弱きかたへと日にすすむ心と知れ  
ごさらへかねつも

今すこし人にかへらば子等などもなだめんと  
思ふいとわろしかし

おなじ世のこととは何のはしにさへ思はれが  
たき口をも見るかな

ただ一目君見んことをいのちにて日の行くこ  
とを急ぐなりけり

戀と云へどあなごりやすき方まじり残されに  
けん一人行きけん

あぢきなくもの哀れなりわがままに誇りなら  
ひし戀のころも

君こひし寝てもさめてもくる髪を梳きても筆  
の柄をながめても

幸さいはひの全まことからざるくやしさを思おもへる人ひとと云いふにかあらん

わが男をとこひとへにたのむ哀あはれさのこの頃ときとなりあからさまなる

こし方かたは心こころにふかくしまざりしことならんなど戀こひのおもはる

その妻つまをいひがひなしと憎にくみつつ罵ののしりつつも歸かへりこよかし

わが前まへに灰かへいろの幕まくらひかれたり除のぞかるる日ひのありやあらずや

十じ歳さいの子こと一ひと人りの母ははとたぐひなく頼たのみかはすも君きみあらぬため



ありし人面かけ忘れがたきより住む家をさへ  
つらく覺ゆる

うらめしと思ふ心もうちかへし音にぞ泣かる  
逢ふすべなきに

心からもてそこなへる身のはてと病めるを悔  
いぬ逢はで死ぬべき

われ泣くと遠方にある人なればさしてたしか  
に知るにもあらず

あな戀しうち捨てられし恨みなどものの數に  
もあらぬものから

はれやかに人目ばかりをもてなしてある人に  
さへならふすべなし

盗みもて行かまほしげにひと一人思へりつる  
も憎からぬかな

さびしさも憂きもさすがにさりげなく書く交  
ながら見ては泣くらん

身も人もいのちの堪へずなりたらば哀れなら  
まし遠く別れて

待つべしとなだらかに云ひ君やりし人ともあ  
らず狂ほしきかな

筆とればまたわが心やるせなく騒ぎそめたり  
文かかて寝む

ものおもひ絶えぬ身なりやその涙熱きつめた  
き何方にせよ

子等を率て家うつりすれ君なくてさすらひ人  
となりけるかな

はて近き世界の如く空も見ゆわが身につけて  
思ふなるらし

思へごもわが思へどもとこしへに歸りこすや  
と心みだるる

われながらあなづらはしく思ふかな巴里の大  
路を君一人行く

紫の衣など見れば束のまは變れる身とも思は  
れずして

年ふれどつゆゆるびなきなからひと我も許し  
つ彼の昨日まで

十餘年またなく君のおもへりし我をみづから  
かたみとぞ見ん

うちそひて巴里のあたりの旅人と呼ばれまし  
かばあらめ生がひ

旅をするよろこびなども聞きなましながらへ  
ましとかつ思へども

よそものに君をなすとは思はねど唯見がたき  
があさましくして

君行きて身内の熱の皆さめしこころも覺ねも  
ゆるを覺ね

わかれ住むかかる苦しきならはでもあらまし  
ものをうつそみの世に

いとかなしうるみ濁れるわが息の籠れる間よ  
り見ゆる大ぞら

やすみなく火の心もて戀ふるなるわれにいつ  
しか君飽きぬらむ

また君を見てかたらはん時のいと長きおそれ  
に病するかな

横たはるけものの如く一とせを思へるままに  
今日か死ぬらん

海こねし旅人の文時をりになげきの家の窓あ  
けに来る

一人居て聞くとささびしうら若き平野萬里の  
支那の話も

わが机死のまぢかにもある如くよれば夜も日  
も涙ながれぬ

客人達哀れは知らぬにもあらず時をたのめと  
をしふる如し

悲しくも君と別れし海の波音すれ病めるわが  
枕上

何ものが心の闇をてらす時またかへりこん君  
としおもふ

風のごとすど行く君に死ぬべしと慄へて云ひ  
ぬ夢のさめきは

うとましく敵の如く手にとりぬ一人寝の床に  
おつるさし櫛

男をば目はなつまじきものとする卑しきこと  
は思はへなくに

一八〇

# 青海波

終

明治四十五年一月廿五日印刷  
明治四十五年一月廿八日發行

青海波

正價金壹圓

著者 東京市麹町區中六番町  
與謝野 晶子

發行者 東京市本郷區本郷四丁目八番地  
阿部 幸作

印刷者 東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地  
今井 鐵次郎

發行所

東京市本郷區本郷  
四丁目八番地

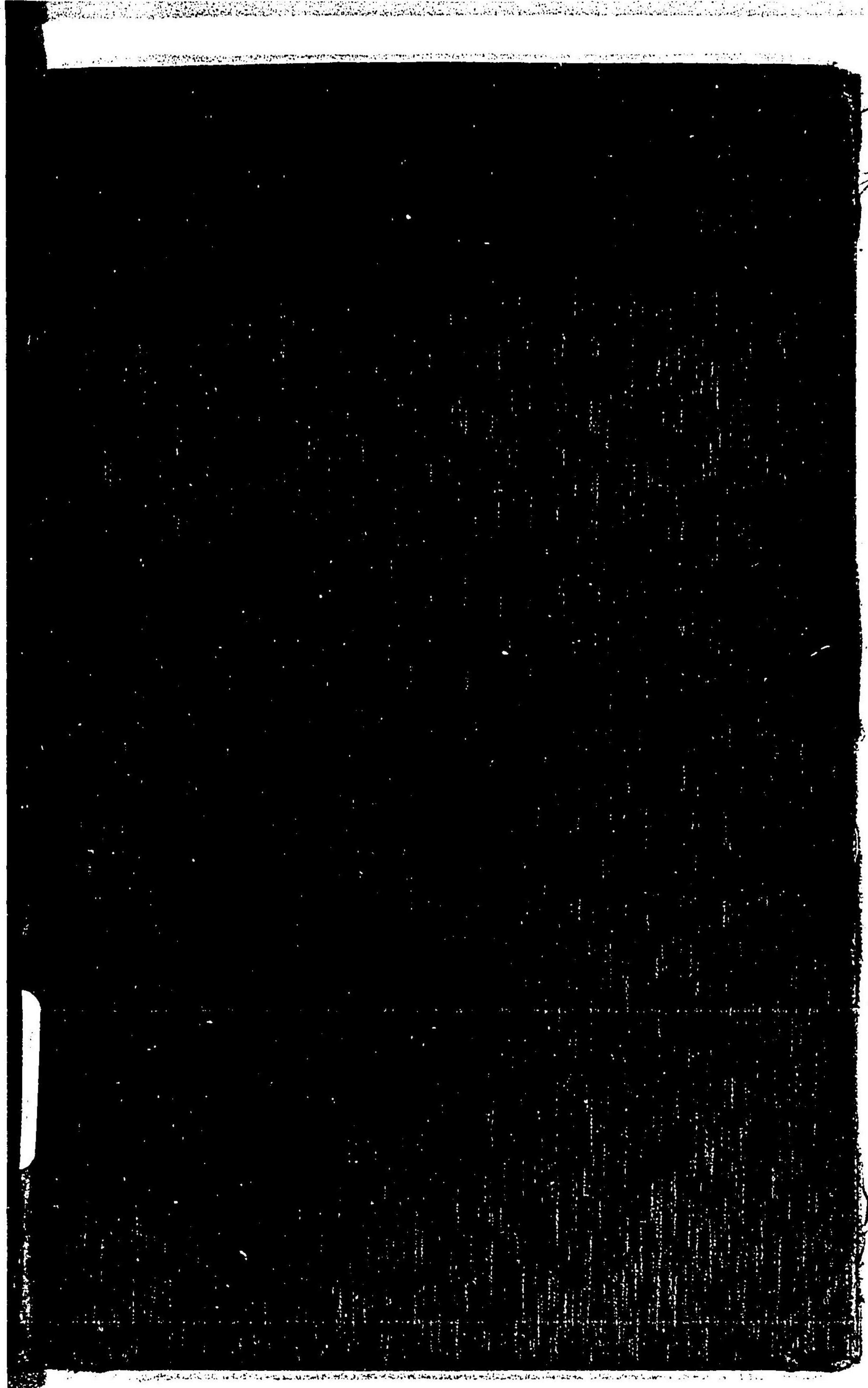
有朋館

電話下谷八一三六  
振替口座一四五三二

8.11. 4



339  
33



339

33

086179-000-4

339-33

青海波

与謝野 晶子/著

M45

DBD-0916

